



日射比例かん水自動制御による 促成パプリカの土耕栽培

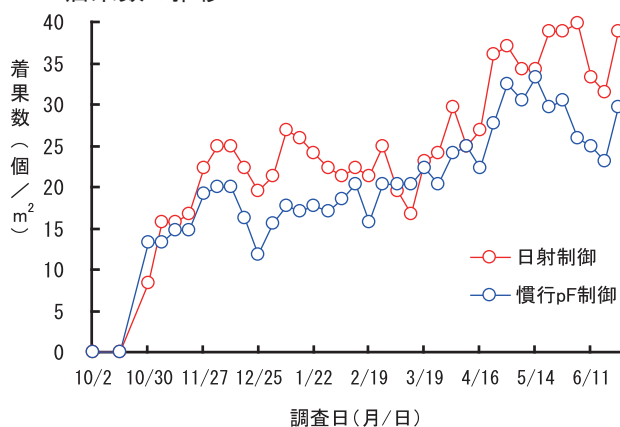


写真1 生育状況



写真2 着果状況

A：着果数の推移



B：可販果収量

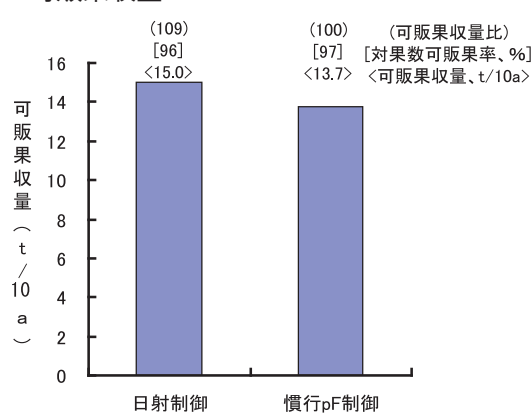


図1 かん水制御方法の違いがパプリカ‘スペシャル’の着果数および可販果収量に及ぼす影響

注) 播種:2008年8月8日、育苗:72穴セルトレイ、定植:9月4日。畝幅:135cm、株間20cm、仕立て方法:主枝2本つる下げ誘引。基肥:窒素成分で10kg/10a、追肥:窒素成分で0.23kg/10a/日。収穫期間:2008年12月8日～2009年6月30日、各区5株調査。株当たり総かん水量:日射制御区;240L、慣行pF制御区;272L。可販果:園芸連出荷規格A品、マルA品、B品。

当センターでは、これまでパプリカの促成栽培において、軒高の低いハウスでも、つる下げ誘引仕立てと密植により、従来の摘心栽培に比べて著しく増収することを明らかにしてきました(第34、37号)。しかし、果実が大きく、完熟させて収穫するパプリカでは着果負担が大きく、生理落果の発生や草勢の低下を招きやすいことが課題として残されていました。

そこで、着果安定による収量性の向上を目的として、蒸発散量と相関の高い積算日射量を指標とする日射比例制御(第45、54号)による少量多頻度のかん水管理について検討しました。

試験では、ハウス内の日射量が一定量積

算されるごとに150mL/株/回を0～15回/日自動的にかん水する日射制御区と、pF1.7以上で2.0L/株/日(12～2月は1.35L/株/日)かん水する慣行pF制御区とを比較しました。

その結果、日射制御区では慣行pF制御区に比べて、着果数が多く維持され、収穫果数も多く、可販果収量が9%多くなりました(写真1、2、図1)。

今後は、日射比例制御による、適正な生育時期別のかん水量について検討する予定です。

なお、本研究は農水省委託研究「低コストで質の良い加工・業務用農産物の安定供給技術の開発」の中で実施しています。

(施設野菜担当 猪野亜矢 088-863-4918)